

# 土佐の堅田一族(六)

高知県須崎市吾井郷乙

堅田 貞志



佐伯文書

南北朝以後の堅田氏

新庄岡本城主堅田又三郎国貞は、南北朝動乱終結により津野七代孫次郎繁高の家人となり、その勢力を分散せられたが、その後の堅田一族はどうなったであろうか。資料不足で調査は困難であるが、関係図書を参考に調べてみました。

## 『佐伯文書』

属石堂左衛門貞秋軍忠節之条 尤神妙也 弥可抽戦  
功之如件

観応二年八月三日

(花押)

堅田九郎次郎殿

この文書によると観応二年(一三五二)八月三日、堅田九郎次郎が石堂左衛門藏人貞秋に属して、どこかの合戦に参加していることがわかる。九郎次郎とは九郎の次男という意味だが、又三郎との関係は不明である。

『佐伯文書』

土佐国津野新莊山方地頭職 梶原村広野郷内半分事

方田治部左衛門尉頼定

右村彼地者為給恩所宛行也 一期之間任先例可致沙

汰之状如件

承和元年八月三日

(花押)

承和元年(一三七五)八月三日、堅田治部左衛門頼貞

に対し、第九代津野備前守元高は、津野領新莊梶原村広

野郷の地頭を命じている。

『佐伯文書』

土佐国津野新莊上分内国弘名代官職之事 当年所領

給也 任先例可致其沙汰之状如件

康曆二年三月十七日

備前守

堅田次郎左衛門殿

『佐伯文書』

土佐国津野本莊神田郷依包名内壹町別相伝也 彼四

分一所宛給也 但 彼地者此間和泉守令知行間之半

分也 為後日状如件

康曆二年三月十七日

備前守

方田四郎五郎殿

『佐伯文書』

土佐国津野本莊多ノ郷上司代官職事 当年所仰付也

任先例可致其沙汰之状如件

康曆元年八月一日

備前守

片田治部左衛門尉殿

康曆元年(一三七九)八月一日には、堅田頼貞を津野

本莊多ノ郷の代官を命じている。

以神妙也 仍可被忠節之状如件

文明十年八月二十三日

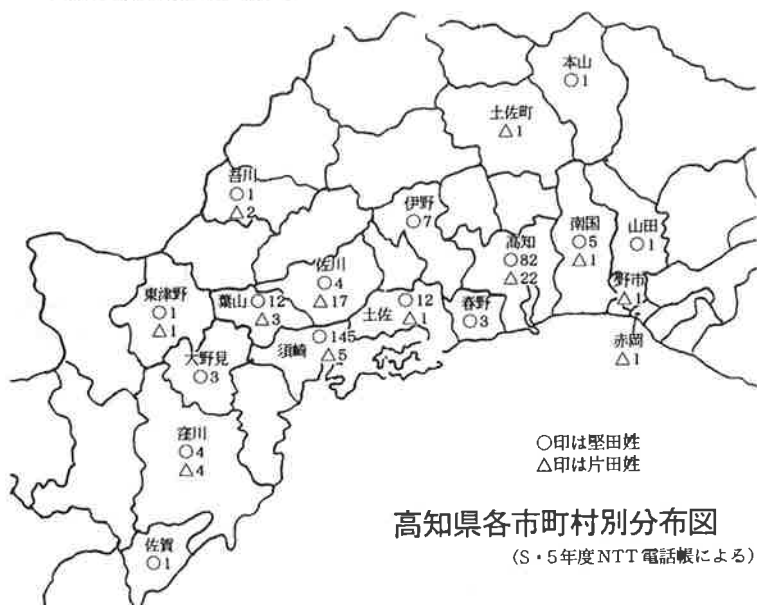
備前守(花押)

堅田治部丞殿

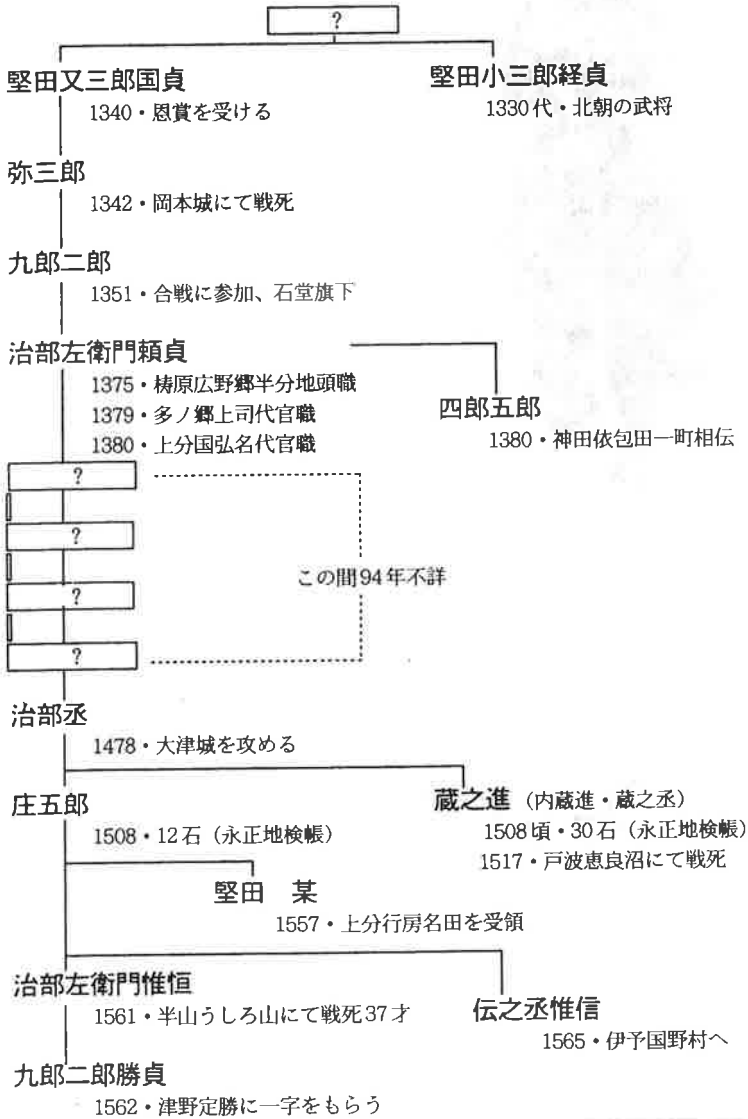
文明十年(一四七八)八月三日、長岡郡大津城を攻めこれを陥し、城主天竺孫八郎を討っている。

『土佐国編年記事略』には

「文明十年戊戌八月三日 津野備前守藤原之裔 長岡郡大津城を攻めてこれを取る 城主天竺孫八郎花氏戦死す」と記してある。



# 土佐の堅田氏系譜



## 土佐堅田氏の入国について

土佐国海辺荘とは、高知県の中央部に位置し、西・北・東を山脈に囲まれ、南に黒潮が流れる太平洋に面し、荘内を流れる桜川や新荘川の流域に広がる肥沃な土地と豊富な海の幸に恵まれた土地でした。

『続日本紀』によると承平年間（九三一―九三七）に海辺荘が成立しており、関係資料によると相当裕福で開けた土地であったと想像できます。

当時この海辺荘を我が手中に収めたく野望を持つ豪族や野党の一団が日夜を問わず乱入、治安は益々悪くなるばかりでした。

年代は不詳であるが住民の願により、讃岐国坂元郷津野荘より高德義清氏（末兼和秀氏の一族）を迎え、高德氏の出身地の地名をもって津野荘として治安に努めました。しかし、凶徒の勢力は強く失敗、隣の半山郷に逃れました。益々無秩序となった海辺荘の住民は、土佐国司に願ひ大名格の武將を招くことになりました。

この大名格の武將とは、九州豊後国佐伯荘の緒方一族でした。

佐伯氏が入国し住民と協力して治安に努めている時、京都での「承久の乱」の関係者として伊予国松山方面に流罪となっていた山内内蔵経高は、罪を赦され四国山脈を越えて仁淀川を下り、高知の西で太平洋に出、海路西に向かい須崎浦に上陸しました。

しかし、海辺荘には堅田（佐伯）氏の勢力が強く、隣の半山郷床鍋という草深い小さな集落に落ち着きました。

山内氏は数年後伊予国境近くの梶原郷に引越し、高德氏の跡を継いで津野に姓を改め、津野荘の開拓を行いました。

この山内氏が須崎浦に上陸した時の様子と、堅田氏の土佐入国について書かれている古文書「田上文書」が土佐の歴史資料「南路誌」にあります。

土佐の中世の一般通説では、山内内蔵経高は延喜十三年（九二二）海辺荘須崎浦に上陸し、床鍋を経て梶原に行き、津野荘（海辺荘をも包含した大荘園）を拓いたという事になっていきます。

しかし最近、山内氏の土佐入国の時期や各世代の年数等に疑問点があり、研究家の間で再調査の声が起っています。

ます。また南北朝動乱の時、北朝の武將として活躍した堅田氏の出自や入国の経緯については、ほとんど明らかにされていない状況です。

須崎市内の堅田姓を名乗る旧家に伝わる「先祖書」によると、

「元祖、豊州佐伯之城主。本国豊後佐伯從三位緒方惟基、惟基裔緒方三郎惟義、惟義之裔緒方惟房、惟房ヨリ堅田ノ号ヲ賜フ。惟房ヨリ十七代孫堅田治部左衛門ナリ。」と書かれています。(おわり)



### 佐伯荘堅田氏について

弘安岡田帳によると、佐伯荘は番匠川流域を中心とした本荘一二〇町と堅田川流域の堅田村六〇町を合わせて一八〇町の所領であった。

初代佐伯惟康は平安末期から鎌倉初期の領主で長男惟朝(総領家)に本荘を、次男惟定(庶子家)に堅田村を相伝した。しかし、惟定の子等はその配分を争い、次第に総領家の作職と化し、子孫は汐月・泥谷・高畑など地名を名乗るようになった。

上記の惟房は惟康の兄、戸次次郎惟澄の孫と思われるが、大神姓戸次氏は大友重秀(三代頼泰の弟)との縁組によって所領を失ったので、あるいは惟房が堅田に帰住していたと考えられなくもない。ただ土佐の堅田氏は経貞・国貞兄弟以降は下の一字「貞」を通字としている点、総領家からは遠い某流と言わざるをえない。

(さとうたくみ)

